

10. 身近な役に立つ地理学的手法

防災への備えでは、ハード、ソフト、政策立案とさまざまな対策をおこなっています。

自然災害は多岐に亘っていて、それぞれへの対応が異なっていますので、そのメカニズムや被害の程度や影響を考慮しながら、機能やコスト、効果などを検討しながら進めてきています。その基本は、命を守るには何が優先され、どのようなことを備え行動するかということで、この基本形をベースにして、その場での対応をするという、いわば応用力が問われているのだと思います。したがって、備えがあるから大丈夫、BCPを保有しているので心配が無いというわけにはいかないぐらい、災害は起きてみないとわからない変幻自在なものです。

それでも、災害には過去の履歴や経験は極めて重要なことで、自然災害の対象となるものも大きく変化変動しています。このような中で災害対策について、過去の考え方の延長で同じような投資をすることが最善なのか、投資の限界も見据えて、発想を変えた構想をあらゆる領域から創出していく必要があると思います。つまり、災害のたびに、つぎはぎ的に実施されてきたような対応を延長することを一度見直すことが必要な気がします。例えば、これまでの経験から危ないところについては補強するか強化するか対応もありますが、一方で被害を受けるようなものを移転させるという方法もあると思います。つまり、発生の度合いや頻度、想定被害範囲や投資効果などの多変数を考慮すべきです。

つまり、防災という目標においても、過去から確実に適切なことを学び、現在というか現状の環境を捉え、未来を創造するということをしていく必要があると思います。

自然現象が大きく変動しわれわれの財産も暮らし方も変化しているのに、これまでと同じようなことを継続していて本当に賢いことなのか、ここで基本に戻って、何のためにということを検討すべき点が多々あるように思います。これは、まさに物事を多面的に捉え、論理的な因果関係を重視する地理的な見方や考え方に通じるものです。つまり、次世代への遺産となるような指針を探っていくことだと思います。豪雨や多雨で川が溢れることがないように、ダムを計画したり堤防のかさ上げをするというのは、一見当然なように思われます。しかし、それはこれまでの暮らし方を維持するということや、どこでどのようなプロセスで河川水が変化していくのかを解明しておかないと、短絡的な対策になってしまい、そのために現在のさまざまな自然環境が

失われるような気がします。つまり、一方的な立場での判断や評価は、全体を見失うことになるわけで、特に自然災害の複雑な現象では、自然のシステムに従う場面もある気がします。